

国営海の中道海浜公園の「森の池」エリアの利用活性化に向けて

国土交通省九州地方整備局国営海の中道海浜公園事務所 戸田 克稔, 岸 功規
復建調査設計株式会社 正会員 真鍋 章良

1. はじめに

国営海の中道海浜公園は一の都府県を越える広域の見地からのレクリエーション需要に対応するために設置された公園で、昭和 51 年に工事着手し、昭和 56 年の第 1 期開園以降順次整備が進められ、全体面積約 540ha のうち現在 249ha が開園している。開園以降、施設の充実に伴い来園者は増加しており、現在では年間約 180 万人に利用されている。玄界灘沿岸部は、玄海国定公園に指定され、一帯の松林は「日本の白砂青松百選」にも選定されている。

本報告は、今後整備を計画している「森の池」エリア(図-1、2)を対象に、主として利用活性化の視点からの種々の取組検討を紹介するものである。敷地の大半が保安林に指定された松林であることから、その保全を基礎に、散策や環境学習利用を主体とするのが一般的であるが、ここでは特に園内の他ゾーンとの役割分担を考慮し、自然に強い興味が無い人でも訪れてみたくなるしかけの盛り込みを意識した。また来園をきっかけに地域の地質や歴史的成り立ちについて興味を持ってもらい、公園とその周辺が一体のフィールド・ミュージアムとして活性化するための核となることを目指し検討を行った。



図-1 検討対象の位置(上)
図-2 「森の池」の空中写真
／過去の水面の出現(右)

2. 計画対象の特徴・固有の資源

2.1 松林と幻の池 「森の池」エリアの面積は約 50ha、大半がクロマツを主体とする林であるが、中央に砂草部がある。この部分が、降雨状況に応じて 1～2 年に一度、夏から秋にかけて湛水し、多様な水際線の変化を楽しめる、いわば「幻の池」である(図-2)。両側を海に挟まれた砂州において、松を育てる真水で宙水の地下水が存在する同様の例に「天の橋立」があるが、ここは地表に水面が見られるごく稀な例である。志賀島の志賀海神社(全国の海神の総本社)にはこの池の伝承が残され、現在も毎年祭事が行われている。

2.2 封じ込められた懐かしい生きもの 海の中道の松林の起源は江戸時代に遡るが、計画地周辺は第 2 次大戦中に皆伐され、戦後改めて植林された。戦後「キャンプ博多」として米軍が駐留していた際に、敷地中央部が若干改変されたものの、返還された昭和 47 年以降は 30 年以上にわたってあまり人手が入っていない。そのため、現在では珍しくなった大型のミノムシ(オオミノガ)や、ジャノメチョウ、マツ林に特有のハルゼミ、半寄生植物のママコナ等、やや懐かしい景色と身近な生物を目にすることができる。

3. 空間の多面的な活用に向けた工夫

一面の松林と、中央にぽっかり空いた「間」。このシンプルな空間をベースに、思いがけない景観との出会い、季節や時間ごとに変化する自然・身近な生物とのふれあいをできるだけ手軽に効果的に楽しむことを計画課題とした。その基礎として、海浜から内陸に向けて漸層的に変化する植生と環境構造(土壌・地形・方位・空間形態等)の分布特性を総合的に把握整理するためのベルトトランセクト調査を軸に、無人撮影機による動物調査、地下水位・水質など多様な角度から現地を把握するとともに、学識経験者等による委員会(委員長 杉本正美 九州芸術工科大学名誉教授)に諮りながら最小限の施設・動線を吟味し、未来に伝える郷土の森としての管理手法を含めて整理した。

3.1 変化する景 全体にやや単調な景観の中で、限られた期間だけ「砂地」から「水面」へ劇的に表情が変化する。群状に分布する種々の草本・低木は「花」「紅葉」「実」と季節とともに色彩が移り、中央部の印象が変わる。こうした変化を魅力として活かすために、利用者からの見え方を 3DCG で再現し、広狭・明暗の対比による印象的な景の演出を意識した園路線形や、林を抜けて大きく視界が開ける位置などを吟味し、休憩所や展望スポット等を設定した(図-3)。この際、降雨データと地下水位変動の関係から水位上昇メカニズムを推定し、湛水頻度と位置を想定してデッキ構造とするなど通行支障部を避ける工夫も行った。



図-3 CG 検討図の例

3.2 五感で「気づき」を引出す 「癒し」の場ともなる、ゆったりくつろげる上質の休憩空間を設け、そこに「五感」に訴えるしかけを用意する。次に記したモデルコースに沿ってヒントをちりばめ、ゲーム感覚で楽しみながら各所を巡ることで、自然の不思議等について自分で考え感じてもらう工夫である。

動植物を主対象にする環境学習は多いが、「池」の存在をきっかけに、地質・土壌・地下水などにも興味を持ってもらうことで差別化を図った。いわば「もぐら」の視点である。海から内陸にかけての漸層的環境変化を体感するために、林内で寝転がるなど非日常的なアングルで自然を眺める「虫」の視点も誘引した。展望スペースから見渡した時、各所に配した目印の見え方が季節・天候によって違うことで空気を感じるなど「鳥」「風」の視点の工夫も行った。他にも、素足で砂地を楽しむゾーン、枕元の植物が香るベンチ、自然音の集音、林内や遠方を見通す鏡、などを検討した。

3.3 ハイライトコース／バリアフリー 自転車利用を組合せた周遊モデルコースを設定した。前掲の特徴的自然・生物資源を「森の池の七不思議」として抽出して四季ごとのモデルコースに組み入れるなど、エリアの魅力を短時間で効率的に楽しめる工夫を行った。これは「家族連れが他エリアで遊んだついでに立寄る」という利用典型への対応とともに、高齢者層が手軽に楽しむためのバリアフリーへの配慮も含んでいる。



図-4 モデルコースの例

3.4 生物情報等を音声ガイダンスで提供 位置同定性を高めるとともに、現地体感に集中し環境学習をサポートするセルフガイドシステムとして、Podcasting等とリンクしたサインポスト（利用者自身の携帯電話等を活用し電気設備不要）の充実を検討した。

4. 「日本の地質百選」候補地としての推薦

「幻の池」の出現は、計画地の特徴的地質構造による現象である。また、海の中道は、全長約 8km、最大幅約 2.5km の大規模な陸繋砂州で、大都市に近い場所でありながら、大半が自然海岸として残されている。

このように様々な地質的特徴を持つ計画地周辺一帯（図-5）を、福岡市と連名で「日本の地質百選」候補

地として推薦した。これは公園利用促進と地域観光振興の相互寄与を狙ったもので、推薦に当たっては、ユネスコの「ジオパーク」の応募ガイドラインに示された以下の5つの自己評価項目に準じて、広域で多様な学習展開が可能なエリアであることをアピールした。

- (1) **地質と景観**：地域を代表する歴史的・文化的景観が存在する。
- (2) **運営組織**：国営公園が核となり、地域の既存ボランティア組織との連携が想定できる。
- (3) **情報と環境教育**：地震防災面も含めて、多様な学習素材を提供できる（2005 年福岡県西方沖地震で被災し、公園には震災学習展示施設もある）。
- (4) **ジオツーリズム**：年代・性格の異なる多様な資源の分布と陸海の多様なアクセスにより豊富な旅行商品等の開発も考えられる。
- (5) **地域経済の将来性**：市中心部・博多湾岸に大規模集客施設があり、フィールドミュージアムとして展開することで地域発展の相乗効果が期待できる。



図-5 日本の地質百選候補地推薦エリア

5. 今後の課題と展開

5.1 保安林機能の維持、地域の文化的景観保全 適正密度と健全な目標樹林への誘導に向けて、植生タイプごとに管理指針を策定しており、ボランティアを活用した参加型管理のしくみの検討が必要である。この際、周辺地域で松林等の保全に向けた取組みを進めている地元組織・専門家等との連携が期待される。

5.2 多様な参加を促す整備 休憩施設やしかけづくりについてデザインコンペを行い、「アジアマンス（平成2年からスタートした国際交流祭典。毎年9月、福岡市内各所でアジアの文化・芸術・学術などを中心に、市民が気軽に参加できる多彩な事業を展開）」と連携したイベント展開などの検討が考えられる。

起伏や水位変動を気にせず、車椅子でも安心して利用するためには「木製デッキ」が有効である。ただし高価でメンテナンスの負担も大きいことから、企業協賛や寄付による整備も検討する必要がある。また体験学習で間伐材利用のベンチづくりを行うなど、多様なスタイルの協働が利用活性化につながると考えられる。